

平成22年5月21日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520383

研究課題名（和文） 削除文に課せられる統語条件と意味条件の研究

研究課題名（英文） A Study on Syntactic and Semantic Conditions on Ellipsis

研究代表者

島 越郎 (Etsuro SHIMA)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50302063

研究成果の概要（和文）：

自然言語における削除文を考察する際には、言語話者がどのような手順に従って削除された箇所適切な意味を与えているのかを明らかにしなければならない。この問題に取り組むために、本研究は、自然言語に存在する様々な削除文の特徴を統語的側面と意味的側面から考察した。研究の結果、省略文の削除箇所には、発音されない代用表現が存在する場合と発音されない統語構造が存在する場面があることを明らかにした。また、後者の場合、省略文は音韻部門における削除操作、または、意味部門におけるコピー操作により形成される二通りの派生があることも明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

When linguists consider the interpretation of elliptical construction in a natural language, they have to clarify the procedures by which speakers of a language are able systematically to generate appropriate meanings for ellipsis sites. I have discussed this question by investigating various kinds of ellipsis from syntactic and semantic perspectives. My research has revealed that ellipsis sites have unpronounced pro-forms or syntactic structures, and that the latter type of elliptical construction is formed by the deletion operation at the phonological component or the copy operation at the semantic component.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2,400,000	570,000	2,970,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：削除 コピー 動詞句削除 間接疑問縮約 空所化 擬似空所化 単一要素残置

1. 研究開始当初の背景

削除文を考える上で重要な問題の一つに、「削除を受けた文の意味内容はどのように復元されるか？」という問題がある。この問題に対して、Rooth [Mats Rooth “Ellipsis Redundancy and Reduction Redundancy,” *Proceedings of the Stuttgart Ellipsis Workshop*, 1992]は、i) 削除された動詞句とその先行詞である動詞句は統語的に同一の構造を持たなければならないという統語条件と、ii) 削除された動詞句を含む文とその先行詞である動詞句を含む文は意味的に対比されてなければならないという意味条件の二つの条件を提案している。また、Fox [Danny Fox, *Economy and Semantic Interpretations*, 2000]は、Rooth の提案する意味的対比条件には統語情報も関与する可能性を示唆している。一方、Merchant [Jason Merchant, *The Syntax of Silence*, 2001]は、統語条件を一切仮定せずに、文全体に課せられる意味的対比条件にのみ基づいて動詞句削除された文の意味内容を復元する可能性を提案している。

このような研究状況を踏まえ、本研究では、様々な削除文の分析を通して、「削除された文の意味内容を復元するに際し、統語情報と意味情報がどのように必要となるのか？」という問題について取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究は、様々な削除文の共通点と相違点を考察した上で、削除文における意味解釈を統一的に説明できる体系的理論の構築を目指す。具体的な研究目的は、次の四つである。

- (1) 削除文は文中のいかなる位置にでも生じるわけではなく、ある決まった環境にのみ生起可能である。また、それぞれの削除文が生じる環境は異

なる。各削除文がどのような環境に生起でき、また、生起できないのかを考察することにより、削除を認可する統語条件と意味条件を解明する。

- (2) 削除文における残存要素は、先行文の要素と対比の関係にある。しかしながら、全ての残存要素が先行文の要素と対比されるわけではなく、それぞれの削除文において対比される残存要素は異なる。また、同一の削除文においても、削除文自体がどのような環境に生起するかにより、対比される要素が異なってくる。それぞれの削除文において何が対比されているのかを考察することにより、削除を認可する統語条件と意味条件を解明する。
- (3) 削除の適用を受ける部分は全く自由ではなく、それぞれの削除文により削除され得る範囲が異なる。例えば、ある削除文では、主節とその従属節にまたがる部分を削除することが可能であるが、このような削除の適用は全ての削除文において許されるわけではない。各削除文における削除可能な範囲を考察することにより、削除を認可する統語条件と意味条件を解明する。
- (4) 削除が許されるのは、基本的に、削除された要素と同一な要素が先行文に存在し、先行文の意味内容より削除された要素が復元できる場合に限られる。しかし、削除された要素と全く同一な解釈を持つ要素が先行文に存在する必要はない。例えば、先行詞文に代名詞が含まれている場合、削除文は先行詞と全く同一である解釈と、代名詞の指示に関してだけ解釈が異なる解釈を持つ。このような多義性はある

一定の条件の下で許されることが知られているが、同様な現象が他の削除文についても見られるかどうかを考察することにより、削除を認可する統語条件と意味条件を解明する。

3. 研究の方法

本研究において取り扱った削除文は、次の(1)から(5)である。

(1) 間接疑問縮約 (Sluicing)

Bill is writing, but you can't imagine where.

(2) 動詞句削除 (VP-ellipsis)

John ate an apple, and Mary did too.

(3) 擬似空所化 (Pseudogapping)

John ate an apple, but he did not an orange.

(4) 空所化 (Gapping)

John ate an apple and Mary an orange.

(5) 単一要素残置 (Stripping)

John ate an apple and Mary too.

間接疑問縮約(1)では、疑問詞 *where* の後に *Bill is writing* が省略されている。(2)の動詞句削除では、助動詞 *did* の後に *eat an apple* が省略されている。(3)の擬似空所化では、助動詞要素 *did not* と目的語 *an orange* の間に *eat* が省略されている。(4)の空所化では、主語 *Mary* と目的語 *an orange* の間に動詞 *ate* が省略されている。(5)の単一要素残置では、主語 *Mary* の後に *ate an apple* が省略されている。

これらの削除文に見られる特徴を、(i)生起できる統語環境、(ii)残存要素とそれに対応する要素との関連、(iii)削除の適用範囲、(iv)削除文が許す意味解釈の四つの観点から考察することにより、削除文における意味復元にとって必要となる統語情報と意味情報の関連について研究を行った。

4. 研究成果

主な研究成果は、次の二点に纏められる。

(1) 削除箇所における統語構造の有無

削除文の削除箇所には、発音されない代用表現を仮定する分析と発音されない統語構造を仮定する分析が提案されてきた。

本研究では、「動詞句削除には削除部分に発音されない空の代用表現が生起する可能性があるが、擬似空所化、空所化、単一要素残には削除部分に空の代用表現を生起させる可能性はなく、必ず統語構造が生起する」という仮説を提案した。これらの削除文が示す以下の事実を統一的に説明することを試みた。

- ① 動詞句削除の先行詞は、談話上において二つ以上先行する文中に存在することができる。一方、空所化の先行詞は、同一文中内、または、直前の文中に存在しなければならない。
- ② 動詞句削除の先行詞は、談話上の文中に存在する言語表現以外に、談話の状況でも構わない。一方、擬似空所化、空所化、単一要素残置の先行詞は文中に存在する言語表現に限られる。
- ③ 動詞句削除の先行詞に再帰代名詞 (*reflexive pronoun*)が含まれる場合、その代名詞は厳密な同一性 (*strict identity*) とゆるやかな同一性 (*sloppy identity*) の解釈を許す。一方、空所化の先行詞に再帰代名詞が含まれる場合、その代名詞はゆるやかな同一性の解釈しか許さない。
- ④ 動詞句削除は一つの構成素を形成しない複数の要素を分離先行詞として取れるが、擬似空所化と空所化と単一要素残置は分離先行詞を取れない。

(2) 削除文の派生：削除とコピー

削除文の削除箇所が発音されない統語構造が存在する場合、削除文の派生として、削除操作に基づく分析とコピー操作に基づく分析の二つが提案されてきた。削除操作に基づく分析では、削除された箇所の統語構造は統語部門で構築されるが、音声解釈部門である PF において音韻情報が与えられず「削除」されることになる (Sag (1976)、Lasnik (2001)、Merchant (2001)等々)。一方、コピー操作に基づく分析では、削除された箇所の統語構造は統語部門で存在しないが、意味解釈部門である LF において省略箇所の空所に先行詞の構造がコピーされる (Williams (1977)、Chung, Ladusaw and McClosky (1995)、Lobeck (1995)等々)。

本研究では、Chomsky (2000, 2001)により提案されたフェーズ理論の下、これらの操作を誘発するコピー素性と削除素性がフェーズである CP と vP 主要部に随意的に基底生成されると仮定し、間接疑問縮約(Sluicing)は CP 主要部に基底生成されたコピー素性により派生し、空所化と擬似空所化は vP 主要部に基底生成されたコピー素性により派生し、動詞句削除は vP 主要部に基底生成された削除素性により派生することを提案した。また、この提案の帰結として、これら四つの省略文が示す次の現象に対して統一的説明を与えることを試みた。

- ① 間接疑問縮では、疑問詞だけが残留要素となる場合は許されるが、疑問詞以外に助動詞要素が残る場合は許されない。一方、動詞句削除においては、主語以外に助動詞要素が必ず残留要素となる。
- ② 間接疑問縮約では、残留要素である疑問詞に対応する語句が先行文において具現化する場合と具現化しない場合がある。一方、動詞句削除では、動詞の目

的語が疑問詞として残留要素となった場合、目的語に対応する語句は必ず先行文中に具現化されなければならない。

- ③ 間接疑問縮約では、残留要素である疑問詞に対応する要素の大半は不定名詞句である。一方、残留要素として主語と助動詞以外に疑問詞も含む動詞句削除においては、疑問詞に対応する要素が不定名詞句である場合、容認可能性が落ちる。
- ④ 間接疑問縮約、動詞句削除、擬似空所化は埋め込み節に生起できるが、空所化はできない。
- ⑤ 動詞句削除と間接疑問縮約では埋め込み節を含む複文を省略できるが、擬似空所化と空所化ではできない。
- ⑥ 動詞句削除においては、省略を受けた文とその先行詞となる文の態が一致しない場合でも許されるが、間接疑問縮約、擬似空所化、空所化の場合は許されない。

以上が主な研究成果であるが、本研究の大きな特徴は、様々な削除文が示す異なる現象を体系的に説明しようとしている点にある。動詞句削除をはじめとする個別の削除文、または幾つかの削除文に関する研究は数多いが、様々な削除文を統一的に取り扱った研究は殆ど存在しないように思える。今後は、今回取り扱わなかった削除文も考察することにより、削除文の意味解釈に関するより体系的な理論の構築を目指す予定である。

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

① Etsuro Shima, “A Review of Kyle Johnson (ed.), *Topics in Ellipsis*,” 査読有, *Studies in English Literature* English Number 51, 2010, 178-188.

② 島 越郎, 「LFコピーとPF削除による省略文の分析」、査読無、*JELS 27 (Papers from the Twenty-Seventh Conference of the English Linguistics Society of Japan)*, 2010, 227-235.

③ 島 越郎, 「省略文の派生：コピーと削除」、査読無、『東北大学文学研究科研究年報』第 58 号、2009、93-112.

④ 島 越郎, 「動詞投射範疇の削除」、査読無、『言語研究の現在』、2008、377-386.

⑤ Etsuro Shima, “Two Types of Elliptical Constructions”, 査読有, *English Linguistics* 25-1, 2008, 292-314.

[学会発表] (計 1 件)

① 島 越郎, 「LFコピーとPF削除による省略文の分析」、日本英語学会 第 27 回大会、2009 年 11 月 15 日、大阪大学豊中キャンパス

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島 越郎 (SHIMA ETSURO)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50302063

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：